

NGO外国人救援ネット・ニュース, No.8

NGO外国人救援ネット, 1999.11.10

請求記号:震災-6-z33. - 9p

* 震災関連記事のみテキスト化しています

◆巻頭言◆

台湾の外国人被災者に多言語情報を 外国人地震情報センター・台湾が活動開始—

多文化共生センター代表 田村太郎

1999年9月21日未明、台湾中部で大規模な震災が発生しました。台湾には全土で約29万人の外国人が暮らしています。今回被害の大きかった台中や南投県には、コンピュータ関係の下請け工場などで多くの外国人が働いていました。台湾では90年代以降、工場や建設現場の労働者が不足し、タイやフィリピンなどから労働者を受け入れ始めました。阪神大震災の被災地には、約2万人の「日本語を第1言語としない」人々が暮らしていましたが、台湾の被災地ではそれを上回る「中国語のわからない」被災者がいると推測されます。

外国人救援ネットとともに、阪神大震災後の被災地で活動をともししてきた多文化共生センターでは、これまでの経験を活かして、多言語での情報提供を台湾のNGOと共同で行うことを、22日に決定し、25日にスタッフを派遣しました。10月1日に台中で「外国人地震情報センター・台湾」を設立し、中国語・日本語・タイ語・タガログ語・インドネシア語・英語の6言語で、ホットラインの開設とニュースレターの発行にあたっています。

じつは、2ヵ月程前に夢を見ました。東京で大震災が起きたのにすぐには行動できない自分に腹が立ち、阪神大震災から4年以上自分は何をしてきたのだ、と落胆する夢でした。それから、震災直後の資料をもう一度整理し、東京で起きたらどう動くか、まとめておこうとしていた矢先のできごとでした。

阪神大震災からもうすぐ5年です。外国人救援ネットも「喉元過ぎれば...」の気分には陥らず、つねに外国人にとって何が必要なのか、震災から得た経験を活かす使命を果たすにはどうすればいいのか、見つめ直さなければならないと思います。5年が過ぎても次の5年があります。東京もいつ、正夢になるかわかりません。災害が起きたら、マイノリティは必ず後回しにされます。

できることはなにか。互いに、精進しましょう。